
銀色の翼

市野川 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の翼

【Nコード】

N8973Z

【作者名】

市野川 梓

【あらすじ】

惑星同士での戦争が日常化した時代に生きる人と人とが生み出す翼という幻影…

人々は再び平和な日々を取り戻す事ができるのか

第一章完結までは猛スピードで投稿しています。

調子が良いときは一日4話ぐらい更新する事もあるかと…

最低でも一日1話は必ず更新しますのでヨロシクです

第零翼 機械の翼

あれから30年という月日がたった。この時代において「30年」と言う月日は旧時代にとって一世紀同等の時だ。惑星同士の宇宙対戦が幾度となく勃発し、星々はそれに追われている。地球と言う星は壊滅状態に陥っていた。決して地球の軍事力や技術が遅れている訳ではなく、ある一つの星が強すぎたのだ。

その星を「ゼアール星」と言う。ゼアール星と同盟を組む星は増え続け、今や銀河系のほとんどがゼアール星連邦軍だ。ゼアール軍は100億という軍勢で地球に攻めてきた。連邦軍に対抗する地球・宇宙警察軍は10億と言う1/10の軍勢で挑んだ。

第五次宇宙大戦に。

この戦いの犠牲は計り知れない。ゼアール軍は機械兵で構成されている。ゼアール兵は殆んどが肉体の半分以上が機械に蝕まれた機械人間アヒューマンなのである。身体に鉄を流し込み、強靱な肉体を手に入れた馬鹿な人間は頭がイカれている。感情がないのだ。嬉しい、悲しい、楽しい、そして苦しみ。あえて感情があると言うならば殺意だけである。逆に地球・宇宙警察軍、通称「EARTH軍」に機械人間はいない。感情を持つ人間である。∴表向きはそうなっていた。しかし世界政府がひた隠し続けている世界機密にはEARTH軍にもただ一人だけ機械人間が存在すると言われている。民間にはもちろん知られていない。日本人でまだ18歳という若い人間である

40XX年4月20日

今日は広瀬佑助の18歳の誕生日である。たった一人で祝っていた。家族をゼアールに殺され友達もみんな徴兵へ行ってしまった。だから身内なんていなかった。少年は幼少期から親に宇宙警察について教育され、今や宇宙警察の最年少の暗殺部隊に所属している。

決して運動能力が優れているわけでもない。昔から小柄な身体だった。何故ゼアールの魔の手から逃れることが出来たのか：それは彼が地球にいる唯一の機械人間だったからであろう。体右半分が機械である。

紛争に巻き込まれて右半分が動かなくなってしまった。父が素晴らしい功績を納めていたためか、世界政府から生え抜きの医者が派遣され大手術の後、この身体になった。わすが九歳の頃の話である。今は宇宙ステーションで暗殺部隊をしている。本人すらよく知らないが暗殺部隊は四人しかいないらしい。佑助は自分が優れているなんて思ったことがない。ましては普通の人間でいたかった。しかし家族の復讐に燃える佑助にとってこれ以上にならない上手い話だった。EARTH軍は7部隊に分かれている。それぞれの部隊に隊長がいて暗殺部隊の人間は全員隊長である。佑助は5番隊の隊長を任されている。あまり知られていないが、第8番隊が特別暗殺部隊である。佑助が機械人間だと知っているのはEARTH軍の隊長、世界政府の上層部の人間ぐらいしかない。

状況は悪化している。EARTH軍の最終防衛ラインがゼアール軍をなんとか地球への侵入を防いでいるが、もうそれも一ヶ月と持ちそうにない。まだ地球には残された人々がいる。緊急措置として簡易人工星「イージス星」に避難させている最中なのだ。

第一翼 暗殺の翼

PM7:15 宇宙ステーションにて

『505号室 第5番隊隊長 広瀬佑助』

とモニタリングされた部屋で佑助は暮らしている。EARTH軍にとって暗殺部隊「Super Nova」のメンバーは宝である。故に身の安全は保証されている。あくまで基地内においてであるが。

暗殺部隊Super Novaの仕事は名の通り暗殺である。宿敵ゼアールの元帥を殺すのが最終目的だ。今回の任務はゼアールの中核部隊長暗殺を命じられているが成功確率は極めて0に近い。Super Novaは今まで1000以上の人を暗殺してきた。そんなベテランでも成功確率が0.009%しかないのだ。命令は4月21日AM10:00に宇宙ステーションを出発である。

突然サイレンが部屋中に鳴り響き静寂を破った。一瞬緊張が走る。「侵入者か！」

折角の誕生日パーティーが台無しである。そつとケーキに刺さっているロウソクの火を消した。

『侵入者ハツケン！侵入者ハツケン！タダチニ5番隊隊長八侵入者ハイジヨニツトメロ！隊員ハゼンイン配置ニツクヨウニ！』

不器用なアナウンスが部屋にこぼれてきた。

「へいへい」

そう言っつて佑助は壁に設置された宇宙ステーションの地図を見ると動いている赤い点を見つけた。

宇宙ステーション内への侵入者の排除は暗殺部隊の役目である。

自動ドアが開いて部屋を出た。するとすぐ横のシャッターが降りて道を塞いでしまった。佑助は廊下の脇についている小さな鉄板の上に乗った。すると佑助を乗せた鉄板は動き始めた。時速80キロはでている。ここ宇宙ステーション通称、守護者達の基地（ガーデ

イアンズコロニー（以下GC）は輪の形をしている。輪の中心部はGCの心臓部である指示棟となっている。何万という人を収容でき、とてもじゃないが歩いて移動はできない。だからこうした移動手段がある。

今回の侵入者のパーソナルレベルは3。結構高い数値だ。パーソナルレベルは最高で5。いままで存在が確認されていない程の力の持ち主であろう。最弱の1でも生命力は普通の人間の10倍はあるだろう。

侵入者はもちろん機械人間であると推測でき油断はできない。

佑助は侵入者を見つけるなり、侵入者目掛けて小型ナイフを投げた。侵入者はそれに気付きナイフをかわそうとするがもう手遅れだった。侵入者である機械人間はその場でバラバラになり鉄の混じった血が辺りに散らばった。そのとたん何処からわいたのか掃除ロボットが死体を綺麗に片付け始めた。

すると廊下を赤く染めていた緊急ランプが消え再び静かなGCへ戻った。

ガラス越しに宇宙を見ると地球の近くで戦闘が行われているをはっきりと確認することができる。この基地からも大勢の兵が駆り出されている。また戻ってこれるのはよくても10人くらいしか居ないのだろう。

佑助が物思いに耽っていると、肩を叩かれた。振り返るとそこには第3番隊隊長 武蔵 大和の姿があった。

第二翼 劇薬の翼

大和は劇薬などの危険物を専門に研究している。いつもコートの中に危険物を隠し持っている胡散臭い奴だ。

あまり仲も良くなか話す気もならない。しかし腕は確かで今までの暗殺において重要な役割を十二分に果たしてきた。

実戦訓練でも佑助の記録を遙かに超えている。バカには出来ない。

姿は何週間も手入れをしていなそうな汚れた顔。無精髭を生やし、白衣は継ぎ接ぎだらけでボロボロ。暗殺部隊なんて高い配給の方なんだから買い替えれば良いのに…なんて会う度に思ってしまう。

片手には試験管。中にはいかにも危険そうな紫の液体が入っている。大和は暫く佑助の顔を見つめると急に喋りだした。

「やあ、ユウ。例の頼まれていた薬出来たよ。いままで作った薬のなかでも指折りの猛毒になったあ」

枯れた、しわくちゃな声。

「それはどうも。案外早かったな。」

佑助は礼を言い怪しそうな薬を受け取った。大和は少し小声で

「そのクスリ…ちよいと法…破ってるからあんまり人前で使わないようにね。」

と忠告してきた。

「殺すか殺されるかって状況で法なんて守ってられるかよ。」

素っ気なく返してまたレールに乗って部屋に帰ろうとした。

すると通信で召集がかかった。指令棟からのようだ。また大和が割り込んできた。

「指令棟から？間違ってもボスなんか…」

佑助は溜め息をついて

「分かってるよー」

と心ない返事をして指令棟に向かった。

佑助は巨大な扉の前に来た。扉の端にはパーソナルレベル4の兵士が立っている。こいつらはSuperNovaでも苦戦を免れないくせ者だ。相手にはしたくない。端に居る無愛想な兵士に話し掛けた。

「第5番隊長、広瀬佑助だ。ボスに呼ばれてやって来た。」

門番はまた顔色一つ変えずに

「では部隊長手帳を見せて貰えますか。」

はあと小さい溜め息をついて佑助は胸ポケットから小さな手帳をだした。

手帳には顔写真、名前などが載っており、個人の証明にも使われている。

しかも部隊長の手帳は特別仕様で裏にSuperNovaのマークと部隊長証が彫られているのだ。

「これは失礼しました。では3ドア開きます。」

すると目の前の巨大な扉は音を立ててゆっくりと開いた。

第三翼 軌跡の翼

扉の中には巨大な「コア」と呼ばれている言わば、GCの心臓がありそれを囲むように大量のオペレーターが常時待機している。みな佑助には眼もくれず忙しそうにモニターに向かって話し掛けている。そのオペレーターの間をすり抜け奥にある小さなドアの前に佑助は来た。

ドアの横に設置された指紋認証と眼球認証、声帯認証と言う嚴重なロックを通って中に入る。

中には一つのデスク、椅子、そして一つのモニター…座っているのがこのEARTH軍最高指令隊長である。

名は誰も知らない。故にボスと呼ばれる。パーソナルレベルは限りなく5に近い、4+++と言う人類最強の人物だ。

噂では19歳と言う若さでこの役職を任されたほどらしい。とてもみなに信頼されており、佑助自身も信頼し尊敬する憧れの人物だ。

滅多に個人には通信をいれない総隊長に呼ばれ、少し緊張気味の佑助はゆつくりと敬礼をした。

「只今、第5番隊長、広瀬佑助、参上しました。」
総隊長は少し口角を上げた。

「おお。ようきた。折角のオフに呼びつけてすまない。緊急の連絡でな。」

部屋は小さな明かりが一つしかないため、あまり総隊長の表情を確認することが出来ない。

「と言いますと…?」

「それが、四日前にゼアールに偵察に行った軌跡が帰って来ないのだよ…。通信も途絶えてしまい、安否の確認もとれない状況でな。」
心なしか総隊長の声が震えている。

「SuperNovaの二人には事前に伝えてあるのだが、ゼアール

ル星への作戦の日程をずらして三時間後にここを発ってもらいたい。

「キセキ…名前は藤咲軌跡。第7番隊隊長でSuperNovaの隊長も務めている。悔しいが最も総隊長に力が近い人間であろう。パ―ソナルレベル4以下の相手ならあまりの殺気で剣を抜くことすら儘ままならない…。今、EARTH軍で総隊長を除くレベル5に最も近いのはキセキだという説が有力である。現にキセキは総隊長の一人息子なのだ。」

そのキセキが任務から帰還しなかった事など今までなかった。心配になるのが普通だ。

「で、君に臨時隊長を務めてもらい、キセキを救出してもらいたい。…戦争に私情を挟んではいけないのは充分承知してるんだがな…。」
総隊長は心配性な事で有名だ。しかしその隊員一人ひとりに対する愛情がこの人を惹き付ける一つの要因なのかもしれない…

「問題ありません。キセキはボスの息子さんである以前に我らのチームメンバーです。メンバーの為にならこの命懸けて助けになりましょう。」

「社交辞令でも嬉しい。では船はセンターに用意してある。準備ができしだい出発してくれ」

第四翼 彼女の翼

こうして佑助は指令棟をあとにした。すると一人の女性が寄ってきた。

佑助の彼女、岩島舞。佑助と同年、パーソナルレベル2+で普段は指令棟のオペレーターをしている。今日はオフなのだろう。

「ねえ、ユウ！お誕生日おめでとう はい、これプレゼント！！」
舞は恥ずかしそうに小包を渡してきた。佑助は少し照れ臭そうに受け取る。

小包を開けると、真っ赤なマフラーが入っていた。

「宇宙って年中寒いでしょ？だからマフラー編んでみたの！どう？
悪くない出来でしょ！？」

早速マフラーを首にかけた。

「暖かい…サンキュー」舞は笑顔のまま続ける。

「よかったあ…それ編んでたら遅くなっちゃって。じゃあ部屋帰ってパーティ始めよ！」

佑助の言葉に満足して廊下を歩き出す舞にそつと話し掛けた。

「いや、パーティはお預けになった…」

舞はすつと振り返った。困惑している。

「えっ？どういうこと？」

「予定が変更になった。三時間後にここを発つ。だからパーティは帰ってきてからだな。」

佑助は視線を舞から逸らして言った。

「変更になったって…今日はオフになったんじゃないの！？折角のユウの誕生日だって言うのに…何で急に？」

舞は食い下らない。

「キセキの安否確認のためだ。…ゼアールに強襲をかける…」
舞の眼がみるみる見開いていく。

「！！！！？？？ゼアールって…ユウ！！もう危険な事はしないって

約束したじゃん！可笑しいよ…今頃になって急に…」

その場にへたり込んでしまった。

「今度は本当に死んじゃうかも知れないのに…ねえ？ユウ…考え直すうよ？」

佑助は何も言うことが出来なかった。そつと舞の横を通り過ぎて、背を向けて

「I love you .」

そう一言いつて立ち去った。

舞は泣いていた。彼が自分の手元から離れてしまうようで。あの時もそうだった。佑助が暗殺部隊に所属になるときもあんな風にかっこつけていなくなった。今回もそうだ。自分を置いて何処かへ行ってしまう。彼女に出来ることはただ無事に帰ってくるように祈る事だけだった。

4月21日AM0:45

いつの間にか目をまたいでいた。佑助は宇宙の中にいる。宇宙船に乗っているのは全員で三人。一人は大和。口を開けて爆睡している。もう一人は黒いフードを被ったコックピットに寄り掛かって寝ている巨漢。

ふと舞に貰ったマフラーが眼に入った。綺麗な編み目はまるで売り物のようだ。

端を見るとユウスケと小さく黄色い糸で縫われている。ふっと小さく笑って佑助は眠りにおちた。

第五翼 魔性の翼

4月21日AM7:10

佑助が起床する頃には他の二人は起きていた。ここは宇宙空間。朝だろうが夜だろうが外は真っ暗だ。時刻を知らせるのは時計のみ。佑助は軽い朝食をとって出撃準備を始めた。

暫くすると目の前のモニターに巨大で真っ黒な星が見えてきた。あれがゼアール星…。これだけ遠くから見ても高層ビル群を大量に確認できる。人工の星なのだ。大きさは地球の約150倍。自然はなく、当然空気も存在していない。それは住んでいる者達が人間で無いことを示している。佑助の肺は人工肺で補われているため問題はない…

次の瞬間、機体に重い衝撃が走った。それと同時に機体内が赤いランプで染まる。鳴り響くサイレンの音

「どうやら敵の襲撃を受けているようだな。」
そう冷静に呟いたのはこの船のパイロット、羽鳥 守。第4番隊隊長である。その巨大な身体を操縦席に持つていき、大袈裟に座り込んだ。

「ぐひゃひゃひゃあ！！人間なめてんじゃねーぞお！？ぶっ殺してやるうゝ！！」

…羽鳥はSuperNovaの中で最も操縦に長けているのだ。その操縦の腕を武器にここまでのしあがってきたほどである。

ここまで宇宙船を上手く操れる人間を佑助は見たことがない。ここが、コイツは戦場となると頭がイカれてしまう魔性野郎なのだ。敵味方関係無くマシンガンをぶちまける、ちょっとアブナイだった。大和と佑助は嫌な予感がしていた。長いこと一緒にいる経験からである。

…やはり二人の予感は的中した。機体が右から左へ大きく揺れる。守は完全に逝ってしまったようだ。こうなるともう誰にも止められ

ない。目の前の敵があつという間に消えて行く。だんだんスピードも上がってきているようだ。ついにスピードが光速に達した。光速は一秒間に地球を七周半できる程早い。もうゼアール星は目と鼻の先である。それでもお構いなしにつき進んで行く。すると羽鳥が言った。

「ぶつつかりまーす！ー！ご注意くーださーい！ー！」

「おい、ちよつとまつ……」

佑助が注意した頃にはもう手遅れ。もの凄い爆音と共にゼアール星に着いた。

AM9:12 ゼアール星第4区画にて

佑助達は大量の機械兵に追われていた。隠密作戦のはずが守が派手に正面から侵入したためゼアールの現存戦力が全てこちらに向かつてきたのだ。

通常兵のパーソナルレベルは2++3程度。佑助達なら充分倒せる範囲だがあまりの数にこれでは太刀打ちできない。

今はとにかくこの戦力をなるだけ減らすのが最優先だ。佑助は意味もなく酸素ボンベを着けながら大和に聞いた。

「おい、大和。あとどれくらいかかりそうだ？」

大和は例によつてボロボロな白衣からこれまた危険そうな薬品同士を組み合わせている。走りながらなので大変そうだ。

「はあ……はあ……あと、250歩くらいか……な？」

後方では守が簡易シールドを張っている。一気に何万という銃弾を受けているため、エネルギーの減りも早かった。

「おい！！もうシールド持たねえぞ！！ヤバくないか！？」

羽鳥も息が上がってきている。佑助はさらりと答えた。

「元と言えばお前の責任だ。後はお前自身が盾になれ。」

「ええ！！……無茶言つなよ……。」

佑助は冷静だった。いままでこんな修羅場は何百と経験してきているのだ。今更焦る必要などない。

「ユウ…出来た！！なんとか…いけそう！！」

大和から合図があった。佑助は突然立ち止まる。後ろから守の聲が聞こえてきた。

「やっとか…。頼むぜ、大和兄」

クルリと振り返り佑助は叫んだ。

「発射つ！！」

第六翼 殺意の翼

佑助の合図と同時に大和は手に持っていたフラスコの蓋を外した。その瞬間、それまで佑助達を追い掛けていた機械兵たちは急にギシギシと音をたててばらばらになってしまった。残ったのは無惨になった無数の機械片…。一瞬の出来事だったため、何が起こったのか理解するのに時間がかかった。守はポカンとしている。

「軽く五万は居たぞ…。それを一瞬で…。機械兵にならなくて本当に良かったわあ。」

コイツの蛇行運転のせいでこんな事態を招いたと言うのにお気楽な奴だ。

大和は自慢げに仕組みを説明しだした。

「まあね。奴らの身体の基盤中枢部を酸化させただけなんだけど、即効性だからすぐばらばらになっちゃった。」

佑助は何が大きな殺気を^{ひしひし}轟轟と感じていた。それと同時に身体右半分に違和感。たぶん大和の劇薬の影響を自分の基盤にも少なからず受けてしまったのだろう。しかしここで症状を訴えれば自分が機械人間であることを晒すことになる。いつあの機械兵達のようにばらばらになるか分からない恐怖と何処から感じる強力な殺意の恐怖が佑助を焦らせていた。

「おい、佑助？大丈夫かあ！？」

守の一言で我に返った。足が震えている。なんだこの底の見えない恐怖は…。

「いや…すまん。何でもな…」

佑助は即座に振り返った。するとそこではばらばらの機械兵の部品達が急速に集まり出していたのだ。なにか形を形成している。

「なんだ…これは…。」

佑助はやつと強力な殺意の出所を確認することができた。部品達はみるみる集まって巨大な機械兵へと変形していく。巨大兵に変化し

ていくと共にその兵達の殺意を吸収しているようだ。大和と守は余りの殺気にその場に呆然と立ち尽くしていた。

この殺気は…キセキ…いや、それ以上…

佑助は必死で背中に手を回して剣を抜こうとしたが指先一本も動かなかった。ただ巨大な殺意に立ち尽くし死を待つのみ身となってしまうのだ。

「身体が…動かない…っ…佑助ッ」

守は俺に助けを求めているようだがどうすることもできない。完全な巨大機械兵となった部品達はその拳に握る刃渡り10m以上の剣を守目掛けて振りかぶった。一瞬、硬直が解けたのかギリギリ致命的な怪我は回避出来たようだが守の腹を剣が見事に切り裂いた。

「ぐああああああっ！！」

辺りに真っ赤な鮮血が飛び散る。守はぐったりと倒れ込んでしまった。まずい…このままだと多量出血で最悪死んでしまう。

大和は返り血を浴びて真っ赤になっていた。それとは逆に顔面蒼白で目は虚ろで恐怖に染まっている。機械兵は続けざまに守に向かって動き出した。もう守に回避する程の力は残っていない。最期の一撃を決める瞬間だった。ガキンッ！！と激しい金属摩擦音が真空を揺らした。着地音と共に三人の前に立っていたのは偉大なる人物だった。

第七翼 最強の翼

「軌跡っ！！！」

そう叫んだのは佑助だった。軌跡と呼ばれた青年は巨人兵の攻撃を易々と受け止めていた。その姿は傷だらけで巨人兵の剣を止める長刀すら所々欠けている。だが立派な顔立ちだけは変わっていないかった。凜々しい眼で巨人兵と目を合わせて囁いた。

「死ぬ覚悟は出来たか？」

それと共に巨人兵を優に越える殺意が身体から流れてきた。その殺意で人を殺してしまいそうだ。そして手に握られた2m程ある白剣で巨人兵を切り裂いてしまったのだ。あまりの殺意で敵も一步も動くことができなかつた。またばらばらの機械片へと変わった巨人兵の身体……。辺りを支配していた強力な殺意は消えた。闘いが終わったのだ。

キセキは刀を懐に納めた。とたんに守に駆け寄った。

「大丈夫か、守っ！？。おい！！大和、応急手当だ！！！」

すぐに大和は守に応急措置を施した。こちら辺は抜け目がない。

「止血は出来た……。意識は暫く戻らないだろうけど、死ぬ事はないでしょう。」

大和の言葉を聞いて安心したのか佑助に歩み寄ってきた。

「佑助：すまない……。心配をかけたようだ。これではリーダー失格だな……。っ！！！」

傷が痛むのか、腕を押さえている。

「ああ軌跡さん！！貴方も手当てしないと！！！」

大和が慌てて軌跡に手当てをした。佑助は軌跡に苦笑いしながら言った。

「そんなことはありません、軌跡隊長。貴方がいなかったら今僕達はここにいませんでしたよ。本当にありがとうございました。」

続いて大和も言う。まだ少し目が虚ろだ。

「そうですね…軌跡さんが自分を責めることもありません。」
軌跡は少し笑った。

「そうか…ありがとう。」

照れ臭そうに笑う軌跡の顔にさっきの殺意は全く見えない。レベルの差を痛い程感じる。「さて…この作戦のリーダーは…まあ佑助だろうな…これからどうする？」

軌跡は佑助に問い掛けた。あくまでこの作戦のリーダーは佑助と決めているようだ。

「…GCに帰還するのが無難かと…。守の意識もなく、隊長もこの怪我…。一度体制を整えるが一番と考えます。」

佑助の意見を聞いて軌跡は満足そうに笑った。

「流石、最年少でここに選ばれただけあるな。俺でもそうするだろう。」

大和も頷いている。

「それに…なにかここの基地はおかしいな…。」

軌跡は意味深な表情をしている。

「と言いますと？」

佑助には言葉の意味が分からなかった。

「…いや、何でもない。とにかく今の俺達じゃあやはりこの基地は難攻不落の城だな。ではGCに戻ろう。」

とたんに佑助は申し訳無さそうな顔をした。この基地に突入時に宇宙船は全壊してしまったのだ。

「なんだ？佑助？どーせ守の奴が宇宙船で基地突っ込んできたんだろ？」

軌跡には全てお見通しのようだ。笑って見せた。

「あんだだけ基地が揺れたんだ、それくらいわかるよ。…あつちに機械兵共が使ってた船があった。それで帰還するぞ。」

第八翼 隊長の翼

4月22日AM10:00

佑助は自分の部屋に戻っていた。誕生日ケーキを一人食べていたのだ。18本並んでいたロウソクも役を果たしていた。やはり一人のパーティーなんてつまらない。佑助はあまり甘いものが好きじゃなかった。

5時間前

暗殺部隊がGCに戻ってきた。ここはセンターと呼ばれる場所で、宇宙船が出入りする言わばGCの玄関である。普段はあまり人もおらず、出入りする船も少ないのだが今日に限っては入口からはみ出る程の船で溢れかえっていた。先程佑助にも伝達があつたが今日、最終防衛ラインAが突破されたらしい。それでGC内が慌ただしいのだ。佑助のいない間、第5番隊副隊長が指示を出していたようだが状況は悪化するばかり…。これでは隊長自ら防衛ラインに出撃しなくては…。

「6番隊は何をしてるんだ…？」

敵から奪った宇宙船を操縦している軌跡が呟いた。この混み具合は異常だ。これではGC内に入る事すら出来ない。守の意識はまだ戻っていない。大和も床にぶつ倒れて寝ている。佑助は一人地球を見つめていた。俺が生まれた時の地球はもう少し青かつたな…。

佑助を乗せた宇宙船がセンターに入った頃には少し船の数が落ち着いていた。慌ただしく働く6番隊員の中に総隊長の姿があつた。

船から降りると総隊長が駆け寄ってきた。総隊長はボロボロになった暗殺部隊の面々を見てしきりに心配した。

「大丈夫か？とても心配したよ…。大和、すぐに3番隊を！！」

大和が寝ぼけ顔で頷いたかと思えば、すぐに3番隊員が集まってきた。守と軌跡をタンカーで運んで行った。3番隊は救護・支援が主な

仕事である。ここの医療は旧時代の医学を遥かに越えるものを持っている。それは隊長が天才科学者の名を欲しいままにしたアノ大和隊長であることも大きく関係している。大和は御満足のようだ。

「流石、あのスピード。呼ばれてすぐ出る3番隊！…カッコいいわあ。」

「確かに凄いよ。流石、3番隊員だな…。」

佑助は取り敢えず適当に返しておいた。

まあ総隊長の意向で衛生兵はすぐに補充されるため常に欠員がないのだ。それならこのくらい当たり前と考えることもできるのだが。

その後、全隊長（軌跡・守除く）は集まり緊急会議を行った。

「どうなっている！？あの軌跡があんなにボロボロになって！予定と大分食い違いがあるんだが？」

そう会議を一言で始めたのは4番隊隊長光村氏。4番隊の主な仕事は司令・遊撃である。司令棟の管理は4番隊の役目だ。暗殺部隊の緊急帰還。軌跡・守の大怪我によって作戦にずれができればいい。

この4番隊の混乱、防衛ラインの突破：これらがGC内のパニックの要因となったようだ。佑助の管轄である5番隊は主に防衛ラインの管理だが、食い違いがあるのはこちらにも言えること。部下の報告によるとあと10日は防衛ラインAはもつはずだった。とにかく佑助自身にも焦りがあった。もう時間がないのに…。焦っている佑助を横目に大和が立ち上がった。

「その件に関してですが、羽鳥隊長の容態は安定していて、藤咲隊長に関してはそんなに深手ではないとの事です。」

その一言を聞いて安心したのか総隊長はその巨大な体を持ち上げて言った。

「それは誠か？…よかった、よかった…。…と言って安心ばかりしている場合ではないな。光村隊長、ゼアールへの奇襲作戦への変更点の報告を。それによつてはこちらの動きも変動するかもしれん。」
総隊長が席につくのと同時に4番隊隊長光村氏は立ち上がり今の状況について報告した。その後、今後の対策を全隊長に言い渡された。

それはあまりにこちらにとって不都合な内容だった。次に佐助の防衛ラインについての報告だった。

「えーっと…皆さん知っての通り、本日未明最終防衛ラインAが突破されました。残る防衛ラインはB・C・Dとなりましたが、副隊長の報告によると最終防衛ラインBに関してはまだ到達されていないとの事です。そこで2番隊、7番隊と提携を結んで戦闘員をいままでの2.5倍、武器は3.25倍にして防衛に当たりたいと考えています。報告は以上です。」そう言い放って席についた。本当だったらこんな会議に参加している場合ではないのだ。今にでも防衛ラインBに行つて状況を確認したいのに。でも今はどうでもいい第1、6番隊の報告に耳を傾けなくてはならない。佐助の焦りは頂点に達していた。

30分後にやっと隊長会議が終わりに近づいたその時だった。GC内にゴトンツとなにか鈍い音が響き渡り、照明が消え会議室内にある巨大モニターが急に音をたてて起動したのだ。ざわめく会議室内…。

「何が起こつたんだ！？2番隊長長！！」

総隊長の怒声で静まりかえるざわめき。守の代わりに出席していた副隊長が状況報告を始めた。

「…どうやらなにかの電波障害による停電のようです。直ぐに緊急電灯が…」

その時、巨大モニターにZの文字が浮かび上がってきた。ゼアール星のシンボルマークである。するとなにか低く暗い声らしきノイズがとびこんできた。

「！？電波ジャックです！ゼアールからの電波、傍受しますっ！！」GC内の電波が全て妨害されているようだ。さっきまで手元のヘッドホンに入っていた副隊長からの報告が聴こえなくなった。これはまずいな…。徐々にノイズからはつきりとした声帯が検出されだした。

「…にちは、GCの守護者のみなさん…」

第九翼 魔術の翼

「…にちは、GCの守護者のみなさん…。驚かせてすみません。ちよいと電波をお借りしてます。すぐにお返しいたしますので暫くの辛抱を…」

不気味な暗い声が空間を支配する。

「だっ誰だっ！？貴様は！！」

一人静まり返っている会議室内で怒声を響かせているのは、すぐに冷静さを無くすと有名な6番隊竹田隊長だ。電波をジャックしているだけなはずだから、相手から返事など…

「…ああ、申し遅れました。私、ゼール連邦軍代表ゴードンと申します。以後お見知りおきを…」

「…！返事があった…。と言うことはただの電波妨害によるジャックではないようだ…。新手の転移技術か？ゴードンと名乗った声の主は続けた。

「…もう皆さまお気づきでしょうが、これは電波妨害ではありません。強いて言うなら…そう！！旧時代的に言う『魔術』と呼べる類いのものでしょうか？」

その言葉を聞いて会議室内にどよめきが起こった。

「んなバカな話があるかつ！！」

まだ竹田隊長の混乱は続く…。

「ただのイタズラだ！！たくっ最近のイタズラは手が込んでいるから困る…。」

どうやら竹田隊長はあくまでも魔術を否定するようだ。だが周りこそうでもない。

「会議は終了だ！！」

と言って勝手に会議室から出て行くこととする。会議室内もかなり混乱している。

「ちよっと…状況確認も出来ない中、個人行動は避けたほうが

…」
と言つ2番隊副隊長の警告も無視して竹田隊長が会議室の扉を開けた時、

「うわああああ！なっなんだこれはっ！？」

隊長の悲鳴にも近い声が聞こえた。会議室がまた静まり返る。

「どうしたんだ、竹田隊長…全く…」

腰を抜かしてその場に座っている竹田隊長を起こそうとした1番隊隊長小野氏も扉の向こうを見たたん悲鳴をあげた。

「なんだと言つんだ二人して！！」

それまで黙りを決めていた総隊長がついに口を開いた。すると小野隊長が顔面蒼白で答えた。

「扉の向こうがっ…おかしなことに…」

総隊長が自ら扉を開けて向こうの世界を見た。すると意外な反応が返ってきた。

「…ついに、魔術を完成させたのか…」
するとモニターから返事が返ってくる。

「…さすがEARTH軍の総隊長…。話をすぐ理解してもらえ助かる。」

それぞれの隊長が各々扉の向こうの世界を凝視していく。扉の向こうにはそこにあるはずのGCの廊下は存在していなかった。紫と血のような朱、それに暗黒そのものの様な黒の絵の具が混ざった世界。まどろみの様：丸でこの会議室が別世界に迷い込んだような。その世界を支配しているのは殺意と恐怖、それに狂気…。宇宙の絶望を集めた世界…。

そんな変わり果てた世界に悲鳴を上げる者もいるが意外にみんなすんなり理解した。

佑助自身にもそんなに驚きはなかった。なぜなら前々から我がEARTH軍も魔術に関しては研究を重ねていたからだ。だがそれは最新の技術でもまだ解明に至っていなかった。魔術の存在が確認された程度のもの。ましては軍事起用など有り得なかった。しかしゼア

ールの技術がここまで進んでいたとは…。

「やはり…私の研究は間違っていた…。」

…確かに大和は早くから魔術の力について独自の研究を行っていた。確か…治療技術に利用しようとかなんとか言っていた。しかしさっきの竹田隊長の様な人もいて思うように研究が進まなかったのだ。得体の知れないものに頼ることに抵抗があるのは分からなくもないが…。

「やっと皆さんに理解してもらえたようですね。まあこのような時空を歪める魔術に関しては制御が余り上手くいってないため長いこと発動できないのが玉にキズですがねえ。」

自分達の研究を敵に晒すなどゴードンと言う奴はかなりの自信家のようなのだ。それともこちらへの挑発か…。…何にしるこの世界から抜け出さない限りどうしようもない。竹田隊長は隣の席で怯えているこの人、肝心な時に全く役に立たないな…。

「安心してください。いきなり皆さんを皆殺し…なんて野暮なことはありませんから。」

くっ…部下と連絡がとれなくなってから暫く経つ。もしこの間にゼアールが攻めてきたら…ここで黙って敵の言うことを聞いている状態が居た堪れない。

「…要件はなんだ…。」

総隊長がモニターに語りかけた。

「要件だなんて。ただちよつとした約束をね…。」
7番隊副隊長と1番隊隊長小野氏が扉の前で武器を構えている。敵が強襲をかけてきたらとのことだろう。しかし魔術を使われたらこちらに勝利はない。最も付け焼き刃であることはこの会議内の隊長全てが分かりきっているだろうが。

「ふふっ…どうやら先程、特別暗殺部隊の方々にはずいぶんお世話になったようで…。私もそのお礼がしたくなりましてね？今から言う場所に必ず来てください。あなたたちの時間で一週間後…。D-3 52星でお会いしましょう。ちよつとしたショーを見せますよ…。」

ではまた…。」

その瞬間、モニターの電源が切れた。同時に会議室内を支配していたまどろみが消えてしまった。武器を構えていた2人が扉を開けたがそこはいつものGC内。どうやら空間魔術は解けたようだった。

その後、総隊長直々に各部隊に命令がくだった。総隊長が命令するなんてそうない。全隊長が一斉に会議室から出ていった。佑助に下された命令は防衛ラインの完全防衛。佑助は副隊長と話をつけ自分自身も参加することになった。

佑助の心配はムダとなった。防衛ラインに被害はなく、むしろ彼方の軍が弱っているように感じていたらしい。佑助はそれに違和感を感じられずにはいられなかった。この世界…何かがおかしい。しかしそんなことより今は防衛ラインの防衛…。これが第一だ。佑助はその考えをすぐに捨ててしまった。

世界の歯車はもう動き始めていたのだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973z/>

銀色の翼

2011年12月31日03時45分発行